

初期近代英語における二つの人称代名詞を含む 二重目的語構文再考

松 元 浩 一

Revisiting of the Double Object Construction Including Two Personal Pronouns in Early Modern English

Koh-ichi Matsumoto

1. はじめに

初期近代英語 (1500 - 1700年) には, 次例 (1) に示すような, 二重目的語がともに人称代名詞である例が観察される。

- (1) a. I never *gave it him* . (OTH. V. ii.67)[1604-5]
b. *Give me't again* . (Jonson, I. i.384)[1607]

上例 (1a) では, 動詞の直後に直接目的語 (*it*) が生起しているのに対して, (1b) では, 間接目的語 (*me*) が生起している。小論では, 前者の形式をまとめて 'give it me' 型の二重目的語構文, 後者を 'give me it' 型の二重目的語構文と呼ぶことにする。以下では, 二重目的語に *this*, *that* などの指示代名詞や *one*, *other* などの不定代名詞を含む例 (e.g. "Give me this." "Give me one.") は, 目的語が人称代名詞ではないことから分析の対象外とする。また, "Give it to me." のような前置詞構文も二重目的語構文ではないことから除外する。⁽¹⁾

初期近代英語には (1) に挙げたような 'give it me' 型, 'give me it' 型の二重目的語構文が観察される一方で, 主語と目的語がともに人称代名詞である (2), (3) のような受動文も観察される。(2) は, その主語が能動文の直接目的語に対応しており, (3) は間接目的語に対応していることから, それぞれ直接受動文 (direct passive), 間接受動文 (indirect passive) と呼ばれる。

- (2) *It* was not lent me neither . (AWW. V. iii.273)[1602-3]
(3) *I* was forbid it . (LR. V. i.47)[1605-6]

今日では, 主語や目的語が人称代名詞ではなくとも, 一般的に, 直接受動文 (e.g. ?"The book was given her.") はほとんど許容されないが, 間接受動文 (e.g. "She was given the book.") はほぼ全て許容される。それに対して, 初期近代英語では, 直接受動文も間接受動文も十分許容される (松元(2004)参照)。

そこで, 初期近代英語の直接受動文 (2) ならびに間接受動文 (3) と, (1) に挙げた能動文を対比してみると, (2), (3) の受動文はいずれも, (1a) の 'give it me' 型能動文に対

応しているのか、(1b)の‘give me it’型能動文に対応しているのか、明確に区別することは困難であることに気づく。つまり、直接受動文も間接受動文も許容される初期近代英語では、たとえば(2)の“*It was not lent me.*”は、“*They didn’t lend it me.*”と“*They didn’t lend me it.*”のいずれの能動文にも対応している可能性がある。こうした初期近代英語の事例については、これまで本格的には論じられていないようである。

そこで小論では、(2)、(3)に挙げた受動文が(1a)の‘give it me’型と(1b)の‘give me it’型のいずれの能動文に対応しているのかを検討してみたい。本論に入る前に、次節「歴史的背景」(§2)と3節「‘give it me’型と‘give me it’型の分布」において両形式の特性を述べ、4節において(2)の直接受動文(e.g.“*It was not lent me.*”)と(3)の間接受動文(e.g.“*I was forbid it.*”)の実態について考察する。以下、Shakespeareの用例はG. Blakemore Evans, *The Riverside Shakespeare Second Edition* (Houghton Mifflin, 1997)から引用し、その作品名は、Marvin Spevack, *The Harvard Concordance to Shakespeare* (Georg Olms, 1973)に拠って次の略記を使用する(TMP, TGV, WIV, MM, ERR, ADO, LLL, MND, MV, AYL, SHR, AWW, TN, WT, JN, R2, 1H4, 2H4, H5, 1H6, 2H6, 3H6, R3, H8, TRO, COR, TIT, ROM, TIM, JC, MAC, HAM, LR, OTH, ANT, CYM, PER, TNK, STM, VEN, LUC, PP, PHT, SON, LC)。

2. 歴史的背景

OEでは文内の語順は比較的自由であったが、それは名詞の格屈折が存在したことによる。しかしその格屈折も、OEの普通名詞ではすでに主格と対格の区別が失われており、さらに与格までも初期ME期には対格に同化して両者の区別が消失する。人称代名詞は、与格と対格の形態上の区別が初期MEまで保存されるが、同時期以降、対格が与格に同化して、やはり両者を区別する格形式は消失する。

このように格屈折が消失すると、二重目的語構文には、両目的語の語順に大きな変化が生じた。Koopman (1994, pp.56-70)によれば、二重目的語形式[V + DO (直接目的語) + IO (間接目的語)]は、両目的語が固有名詞か普通名詞の場合、初期ME以前には46%を占め、他の形式[V + IO + DO] (54%)と競合していたという。つまり、両形式は互いに文形式上の区別を保持していた。しかし格屈折の水平化と消失に伴い、[V + DO + IO]形式は初期ME以降徐々に衰退し、初期近代英語になると、[V + DO + IO]の配列が[固有名詞 + 固有名詞]、[普通名詞 + 普通名詞]、[普通名詞 + 固有名詞]、[固有名詞 + 普通名詞]の場合には使用されなくなり、[人称代名詞 + 普通名詞]、[人称代名詞 + 固有名詞]の場合も、明らかに逸脱した形式となる(cf. Polo 2002, pp.125,133)。ところが初期近代英語では、両目的語が共に人称代名詞で、かつ直接目的語が*it*という条件のもとでは、逆に[V + DO + IO]が、当時すでに分布上優勢であった[V + IO + DO]を圧倒する(松元2002, pp.37-43参照)。

以上のような[V + DO + IO]形式と[V + IO + DO]形式の発達概要をPolo (2002, pp.125-133)とMcFadden (2002, pp.113-114)を参考にして図示すると次のようになる。下図中、形式5 [IO (pn) + DO (pn)]と形式6 [DO (pn) + IO (pn)]は、今日のアメリカ英語では許容されないのが通例であり、注意を要することから、PE期には‘*’を付して他と区別する。‘fn’ (= full noun) は固有名詞か普通名詞を、‘pn’ (= pronoun) は人称

代名詞を表す。

< 図 I >

	OE	EME	LME	EModE	LModE	PE
1. [IO (fn) + DO (fn)]	—————▶					
2. [DO (fn) + IO (fn)]	—————▶1400s †					
3. [IO (pn) + DO (fn)]	—————▶					
4. [DO (pn) + IO (fn)]	—————▶1400s †					
5. [IO (pn) + DO (pn)]	—————▶*					
6. [DO (pn) + IO (pn)]	—————▶*					

まず、図 I に挙げた各変異形の IO と DO の語順のみを見てみよう。間接目的語が先行する [IO + DO] 形式 1, 3, 5 は、OE 以来の全史を通じて不変に観察されることから二重目的語構文の基本型と考えられる。また OE では、一般的に、間接目的語と直接目的語の語順は、“I gave her a present.”、“Her were given presents.”のように、態 (voice) に係わらず、相対的語順のうえでも間接目的語が先行するのが原則である (cf. Fries 1940a, pp. 252-253; 1940b, pp.201-202.)。このことから、歴史的に見ると、[IO + DO] の語順が基本型であると推定される。

次に両目的語がとる名詞について見てみよう。図 I が示すように、両目的語に full noun を取る形式 1, 2 は初期 ME 頃まで並存している。その時期までの両形式の分布は、先述のように、形式 2 [DO (fn) + IO (fn)] が半分以上の 46% を占め、形式 1 [IO (fn) + DO (fn)] (54%) に迫る勢いであるという (cf. Koopman 1994, pp.56-70)。つまり、両形式は初期 ME 頃まで互いに競合関係にあったことが判る。

それでは、両目的語が代名詞と full noun から構成される形式 3, 4 はどうであろうか。図 I が示すように、形式 3 [IO (pn) + DO (fn)] は、人称代名詞 (pn) が先行するのを OE 以来今日まで続く原則とする (cf. Polo 2002, p.133; van Kemenade 1987, pp.188-205)。それに対して形式 4 [DO (pn) + IO (fn)] は、人称代名詞 (pn) が先行していても、それが DO として生起すると、1400年代終わり頃には衰退してしまう。

以上のことをまとめると、歴史的には、二重目的語構文の基本形は、間接目的語が先行する [V + IO + DO] の形式 1・3・5 であり、そのなかでも間接目的語 (IO) が代名詞である形式 3・5 が基本的である。しかし今日では、形式 5 はアメリカ英語では許容されず、イギリス英語でも周縁的であることから、形式 3 が最も基本的な形式であると言える。基本形式 3 がもつこの特徴は、Quirk et al. (1985, p.1396) や Biber et al. (1999, p.929) が述べる今日の特徴と合わせて考えると、OE 以来今日まで続く本構文に特有の不変的性質と言える⁽²⁾。

また通言語的に見ると、間接目的語が人称代名詞である点は、今日のヨーロッパ諸語でも英語でも、よく知られた語用論上の制約になっている (cf. McFadden 2002, p.114; Siewierska and Bakker 2007, pp.116-117)。

一方で、直接目的語が人称代名詞なら間接目的語もまた人称代名詞であるという一般化も一部可能である (cf. Siewierska and Bakker 2007, pp.116-117)。このことに抛れば、図 I に示した二重目的語形式 4 [DO (pn) + IO (fn)] は、この一般化に反しているため、

発達の途中で1400年代末までに廃用に帰したと説明可能である。他方、形式5 [IO (pn) + DO (pn)] と6 [DO (pn) + IO (pn)] は、両目的語が格形式を保持している人称代名詞で、この一般化に合致していることから、イギリス英語では今日まで残存しているのだと説明できる。ただ、それらの今日の用法は口語に限定されているので必ずしも通例とは言えず、使用状況もイングランド北部などの一部地域に限られている。またアメリカ英語に至っては、形式5, 6は全く許容されないと言ってよい (cf. Gerwin 2013)。

それでは、これらの形式5 [IO (pn) + DO (pn)] と6 [DO (pn) + IO (pn)] がそれぞれ対応する ‘give me it’ 型 (用例 (1b)) と ‘give it me’ 型 (用例 (1a)) は、初期近代英語ではどのような分布状況にあるのであろうか。次節で詳細を述べる。

3. ‘give it me’ 型と ‘give me it’ 型の分布

松元 (2002, pp. 35-44) は初期近代英語 (1500-1700年) の100作品を精読、調査し、二重目的語の両方に人称代名詞を取る動詞の数とその用例数を提示している。それによると、‘give it me’ 型能動文には下記表 I のように、*afford* ほか29個の動詞が合計185例、‘give me it’ 型能動文には *bring* ほか10個の動詞が合計37例観察される。表中の *forbid* と *spare* に引かれた下線は、両動詞が ‘give it me’ 型には見られないことを表す。ともに典型的な授与ではなく、授与の禁止や猶予 ([x CAUSES y NOT TO HAVE z]) を含意している点で興味深い。

<表 I> ‘give it me’ 型と ‘give me it’ 型の出現数

	動 詞	動詞数	用例数
‘give it me’ 型	<i>afford, ask, bring, commend, deliver, deny, do, enjoin, fetch, forgive, give, grant, lend, leave, pay, play, read, render, requite, sell, send, show, take, teach, tell, tender, throw, work, yield</i>	29	185
‘give me it’ 型	<i>bring, fetch, <u>forbid</u>, give, grant, lend, show, <u>spare</u>, tell, yield</i>	10	37

全体的に見ると、‘give it me’ 型が動詞数、用例数とも ‘give me it’ 型より圧倒的に優勢である。このことから、二重目的語がともに人称代名詞である時の両目的語の語順は、‘give it me’ 型能動文が中心的 (core)、‘give me it’ 型能動文は周辺的 (peripheral) であると言える。

‘give it me’ 型が中心的であるのには、人称代名詞に置かれる強勢上の理由も関与している。Jespersen (1927, §§ 14.7.3-4) は、‘give it me’ 型では *it* のほうが *me* よりも弱強勢であることから、文末の焦点位置ではなく、動詞の直後に配されることでリズムの要請に適うと述べている。また “Give it to me.” のような前置詞構文は、*it* が弱強勢であるため後続の *to* と同化して [ittə] > [itə] > [it] となり、ある一時期に *to* を欠いた ‘give it me’ 型二重目的語構文を派生した可能性があると言う。Jespersen による後者の説明は、表 I に挙げた *forbid* と *spare* が ‘give it me’ 型ではなく、‘give me it’ 型に生起することにも関係する。つまり、*forbid* と *spare* は、典型的な授与動詞が表す主題関係 ([x CAUSES y TO HAVE z]) を含意するというより、授与の禁止や猶予を表す [x CAUSES

y NOT TO HAVE z] を含意するが、これら二つの主題関係は、NOT の有無を除けば、x (Agent), y (Receipient), z (Theme) の三項が表す基本的な意味役割は同一である。このことから、*forbid* と *spare* は、基本形 [V + IO + DO] の語順を具現した ‘give me it’ 型に生起すると考えられる。一方で、Jespersen が示唆するように、‘give it me’ 型は、ある一時期にそれ自体のほかに、“Give it to me.” のような前置詞構文からも派生されて存在していたとすると、それが表す主題関係は“Give it to me.” と同じ [x CAUSES z TO GO TO y] と表示される。このことから、[x CAUSES y NOT TO HAVE z] をもつ *forbid* と *spare* とは相容れず、結果的に、両動詞とも ‘give it me’ 型には生起しないと考えられる。

以上のように初期近代英語では、2つの目的語に人称代名詞を取る二重目的語構文は、‘give it me’ 型が優位にあり中心的形式として確立しているように見える。ところが、表 I の調査結果をさらに分析すると、必ずしもそうとは言えない状況が現れる。

次の表 II は、松元 (2002, p.39) にもとづいて、‘give it me’ 型能動文、‘give me it’ 型能動文を、直接目的語が文字どおり *it* の場合と *it* 以外の *me, us, you, thee, him, her, them* の場合に分けて出現数を示したものである。

<表II> 直接目的語が *it* と *it* 以外のときの両形式の出現数

直接目的語	‘give it me’ 型	‘give me it’ 型	計
<i>it</i>	166 (98.2%)	3 (1.8%)	169 (100%)
<i>me, us, you, thee, him, her, them</i>	19 (35.8%)	34 (64.2%)	53 (100%)
Total	185 (83.3%)	37 (16.7%)	222 (100%)

表 II を全体的に見ると、総数222例中 ‘give it me’ 型は185例 (83.3%)、‘give me it’ 型は37例 (16.7%)と、‘give it me’ 型が圧倒的に優勢である。また、直接目的語が文字どおり *it* の場合、‘give it me’ 型が98.2%、‘give me it’ 型は1.8%と、‘give it me’ 型が ‘give me it’ 型を完全に凌駕している。しかも興味深いことに、‘give me it’ 型は Shakespeare には全く見られず、本調査 (1500-1700年) には次に示すわずか3例 (1.8%) が見られるのみである。

‘give me it’ 型

<give> *Give me't again* . (Jonson, *Volpone* I. i.384) [1607]

<show> I pray you *show me it* a little . (Gascoigne, *Supposes* I. ii.28) [1573]

<tell> Go thou and seke as fast as thou can, And *tell hym it* . (J. Heywood, *Johan Johan* 81 [1533])

このように、‘give me it’ 型は、直接目的語を *it* に限ると、わずか3例しか見られないことから、初期近代英語期 (1500-1700年) を通じて一般に用法上の制約が非常に強い。今日でも、この形式はアメリカ英語では事実上ほとんど許容されず、イギリス英語でも一部の方言を除けば稀である (cf. Quirk et al.1985, p.1396; Biber et al.1999, p.929; Gerwin

2013, p.447)。他方, ‘give it me’型は, 本調査が対象としている1500年から1700年までのイギリス英語では ‘give me it’型より圧倒的に優勢である。この状況は, 竹林ほか(1988, p.101)や松元(2002, pp.39-41)が1600年前後の時期(松元(2002, p.41)によると1571-1630年)には ‘give it me’型は十分に一般化していると述べることに符合する。

ところが, 直接目的語が *it* ではなく, 例えば “I’ll give *them him*.” のように, *it* 以外の *me, you, him, them* 等の場合はどうであろうか。表 II を見ると状況が異なっていることがわかる。‘give it me’型は35.8%, ‘give me it’型は64.2%と, ‘give me it’型のほうが圧倒的に使用頻度が高い。しかも次の表 III を見ると, ‘give me it’型は, ‘give it me’型よりも出現動詞の数までも多いことがわかる。表 III を見てみよう。

表 III は, 直接目的語が *it* 以外の人称代名詞 (*me, us, you, thee, him, her, them*) を取るとき, ‘give me it’型能動文と ‘give it me’型能動文に生起する動詞の数を示している(表 III は, 松元(2002, p.41) から引用)。

<表 III> 直接目的語に *it* 以外の人称代名詞をとる場合の分布

	give it me	give me it			
			play	1	0
bring	2	1	show	2	2
fetch	0	2	spare	0	1
forbid	0	1	teach	1	0
give	11	15	tell	0	5
grant	0	1	yield	0	2
lend	0	4	合計	19	34
leave	2	0		(35.8%)	(64.2%)

この表からもわかるとおり, 直接目的語に *it* 以外の人称代名詞をとる場合 (e.g. “I’ll give *them him*.”), ‘give it me’型には, 上記13の動詞のうち典型的な授与の意味を表す *bring, give, leave, show, teach* 及び *play* の計6個が見られる。これに対して ‘give me it’型では, *bring, fetch, forbid, give, grant, lend, show, spare, tell, yield* の10個が観察される。このことから, 直接目的語に *it* 以外の人称代名詞をとる場合は, 今日の通常二重目的語構文と同じ [IO + DO] の語順をとる ‘give me it’型が明らかに優勢である⁽³⁾。すなわち, ‘give me it’型のほうが中心的 (core) 形式であり, ‘give it me’型は用法上の制約が強い周辺の (peripheral) 形式であると言える。Jespersen (1927, §§ 14.7.1, 14.7.4-5) は, 直接目的語が *it* 以外の人称代名詞を取る “I’ll give *them him*.” のような場合; give it me’型では「人にものを授与する」という意味関係が曖昧であると述べる。つまり, [IO + DO] という二重目的語形式には, 先行する間接目的語 IO は受容者, 後続する直接目的語 DO は授与されるもの, という意味的な制約が存在するが, “I’ll give *them him*.” のような場合, この意味的制約に解釈上の多義性が生じる。この用例では, *them* が IO で受容者を表すとも, *him* が IO で受容者を表すとも, 多義的に解釈される。そのため, 通例の [IO + DO] 語順を取らない ‘give it me’型は, 授受の意味関係や文法関係が一層不明瞭となる。他方, ‘give me it’型は, OE 以来今日まで続いている基本型の [IO + DO] 語順を保持している。このことから, 先行する間接目的語の IO は受容者, 後続の直接目的語 DO は授与されるもの, という各目的語と意味役割との対応関係に多義的解釈は起こりにくい。その結果, 表 III が示すように, ‘give me it’型は用例数も出現動詞の数も多く見

られると推定される。

こうした目的語と意味役割との対応関係の背後には、文法関係（統語形式）と主題関係（意味）は一対一に対応するという文法原理（‘one-to-one correlation between form and meaning’）が存在している（cf. Bolinger 1977, p. x; Schlüter 2005, p. 68）。すなわち、一般的な二重目的語構文は、間接目的語、直接目的語という目的語の順に、受容者（Recipient）、主題（Theme）という意味役割が其々この順に一対一に対応している。表 III が示すとおり、この一対一の対応原理は、その原理に適った ‘give me it’ 型のほうが分布上圧倒的に優勢であることから、初期近代英語期にも機能していると言える。また、一般的に、同一文中に与格目的語と対格目的語が生起する場合、与格が対格よりも相対的に先行することを § 2（歴史的背景）でふれた。この原則は「位置の圧力」（‘pressure of position’）と呼ばれている。“I’ll give them him.” のように、主題関係の解釈に多義性が生じる場合は、位置の圧力が働いた結果、表 III が示すように間接目的語が先行する ‘give me it’ 型が優位になったと考えられる（cf. Fries 1940a, pp. 252-253; 1940b, pp. 201-204; 荒木・宇賀治 1984, pp. 297ff; 宇賀治 2000, p. 301）。

以上のことから、次のようにまとめられる。

(i) “I’ll give them him.” のような用例では、直接目的語が *it* 以外の人称代名詞であるため、授与される物とその受容者との意味の関係が不明瞭となり、表層上の語順だけでは ‘give it me’ 型と ‘give me it’ 型を判然と区別するのが難しい。

(ii) 一方、OE 以来今日まで基本型として存在している [V + IO + DO] 形式と、その形式に対応する授与される物と受容者との主題関係 [x CAUSES y TO HAVE z] は、初期近代英語では十分確立した形式と意味との対応関係を表している（cf. Jespersen 1927, § 14. 7.4）。そこで、“I’ll give them him.” のように文の主題関係が多義的な用例では、基本形の主題関係を具現した語順を取る ‘give me it’ 型のほうが使用頻度、動詞数ともに高い。

(iii) その結果、直接目的語が *it* 以外のときは ‘give me it’ 型が中心的形式になっている。

(iv) このような ‘give me it’ 型の分布には、統語形式と意味の一対一の対応原理と位置の圧力の原理が関与していると推察される。

(v) 目的語が *it* のときは、それが物を表す直接目的語であることは明らかであること、よって文が表す授受の意味関係も分明であること、音声上弱強勢の *it* は動詞の直後に置かれることから、‘give it me’ 型が中心的形式になる。

このように、‘give it me’ 型と ‘give me it’ 型を比べると、直接目的語が *it* であるか否かによって、用法上の制約があり、この 2 つの能動文は異なる分布を示すことがわかった。ところが、直接目的語と間接目的語がともに人称代名詞である場合はさらに、受動文の分布にも興味深い違いが観察される。次節ではこの点について詳しく分析する。

4. 受動文の分布

二重目的語構文の受動文は、OE においては直接目的語を主語とし、間接目的語はそのまま動詞句内に残留した。ところが、一般に間接目的語は人間を表すことから焦点の位置である文頭に置かれることが多かった。文頭の間接目的語は、OE においては極めて稀に、13世紀に入ると徐々に（cf. Visser 1973, pp. 2144-2145）、主語として分析されるようにな

り、間接受動文が現れる。荒木・宇賀治 (1984, p.298) は、間接受動文は15世紀に入って頻度を増し、近代英語期に入って真に確立すると述べるが、松元 (2004, p.34) はより時代を特定して、1600年前後、すなわち1571-1630年辺りには十分確立していると言う。その後ますます間接受動文の勢いは増し、二重目的語の相対的語順は与格が対格に先行するという一般的原則 (位置の圧力) にも合致していることから、今日に及ぶまで一貫して発達している。一方、直接受動文は、OE 以来続く文法に即して直接目的語を主語とするが、人を主語に据える英語史上の一般的傾向もあって、後期 ME 以降次第に劣勢となり、今日の英語では稀であると言われる。それでは、' give me it ' 型と ' give it me ' 型に係る受動文は、初期近代英語ではどのような状況にあるのであろうか。

本調査には、先の (2) に挙げた " *It was not lent me neither.* " (直接受動文) , および (3) に挙げた " *I was forbid it.* " (間接受動文) に対応する用例が、以下に挙げる 9 個の動詞に合計13例観察される。これらの受動文は、先の表 に示した能動文の数に比べると出現数が少ない。このことから、二重目的語が共に人称代名詞のとき、初期近代英語の受動文 (特に間接受動文) は用法上の制約が強いと言えよう。

< bring >

Gloucester: When came you to this? Who brought it?

Edmund: *It was not brought me,* my lord; (LR. I. ii.58-59) [1605-6]

Sir, I will give you as much as this old man does when the business is perform'd, and remain (as he says) your pawn till *it be brought you* . (WT. IV. iv.821-823) [1610-11]

< enjoin >

de Armado: The naked truth of it is, I have no shirt; I go woolward for penance.

Boyet: True, *it was enjoin'd him* in Rome for want of linen; (LLL. V. ii.710-713) [1594-5]

< forbid >

Albany: Stay till I have read the letter.

Edgar: *I was forbid it.* When time shall serve, let but the herald cry , (LR. V. i.47) [1605-6]

< give >

Good Master Person, be so good as read me this letter. *It was given me* by Costerd , (LLL. IV. ii.90-91) [1594-5]

King: Where did you buy it? Or who gave it you?

Diana: *It was not given me,* nor I did not buy it . (AWW. V. iii.271-272) [1602-3]

< lend >

King: Who lent it you?

Diana: *It was not lent me neither* . (AWW. V. iii.273) [1602-3]

It was lent thee all that blood to kill . (LUC.627) [1593-4]

< send >

Good Master Person, be so good as read me this letter. It was given me by Costerd, and *sent me* from Don Armado. I beseech you read it . (LLL. IV. ii.90-92) [1594-5]

Eleven hours I have spent to write it over, For yesternight by Catesby *was it sent me*;
(R3 .III. vi.5-6) [1595-6]

< teach >

Messenger: Pompey is strong at sea, And it appears he is below'd of those That only have
fear'd Caesar; to the ports The discontents repair, and men's reports Give him much
wrong'd.

Caesar: I should have known no less. *It hath been taught us* from the primal state That he
which is was wish'd , (ANT. I. iv.36-41) [1606-7]

< tell >

Polixenes: Ay, and make it manifest where she has liv'd, Or how stol'n from the dead.

Paullina: That she is living, *Were it but told you*, should be hooted at Like an old tale;
(WT. V. iii.114-116) [1610-11]

< yield >

I will write. Send your trunk to me, *it shall safe be kept*, *And truly yielded you* .

You're very welcome . (CYM. I. vi.208-210) [1609-10]

以上が1500-1700年を対象とする本調査で観察された受動文の例である。これらは、全て Shakespeare (1589-1613) の作品のみに観察される。つまり、上記受動文は限定的で周辺的な現象と言える。また、2つの人称代名詞のうち、必ず一方は *it* である。その *it* は、13例中 *forbid* を除く12例では直接受動文の主語であり、*forbid* の例のみ間接受動文の保留目的語になっている。

そこで上記受動文が対応する二重目的語能動文について考えてみよう。結論を先に述べると、*forbid* を除けば、12例のいずれもが 'give it me' 型能動文に対応すると仮定される。その根拠は以下のとおりである。

12例の直接受動文において、*it* は主語として生起していることから、それら受動文に対応する能動文を仮定してみると、どの能動文にも *it* が目的語として常に存在する。*it* が目的語として能動文に存在するとき、'give it me' 型と 'give me it' 型の2つの能動形式が考えられるが、§3 ('give it me' 型と 'give me it' 型の分布) において指摘したよ

うに, 'give it me' 型能動文は全体で166例(98.2%), 'give me it' 型は, 初期近代英語を通じて僅か3例(1.8%), Shakespeare には皆無である。一方, 上記12例の直接受動文は全て Shakespeare を出典とするが, その Shakespeare には直接目的語に *it* を伴う 'give me it' 型能動文は全く観察されないので, 12例全てが対応する能動文は, 'give me it' 型ではなく, 'give it me' 型能動文ということになる。換言すると, 初期近代英語期を通じて僅か1.8%しか見られない 'give me it' 型能動文が上記12例の受動文に対応する能動文であると仮定するには論理的根拠に乏しい。

以上のことから, 上に挙げた2つの人称代名詞を含む12の直接受動文が対応しているのは, 'give it me' 型の二重目的語能動文であると推定される。また, 人称代名詞は格形式が明確であることから, 受動化に際しては直接目的語(ここでは *it*) を主語にするという OE 以来の文法規則が上記12例には依然として保持されていると言えよう。一方で, 'give it me' 型能動文は, Jespersen (1927, § 14.7.3-4) が示唆するように, 'give it to me' 型前置詞構文の変異形と解される (§ 3 ('give it me' 型と 'give me it' 型の分布) 参照)。とすれば, 上記12の直接受動文が真に対応しているのは, 'give it me' 型能動文というよりも 'give it to me' 型前置詞構文であることが強く示唆されよう。仮にそうであるならば, 'give it to me' 型前置詞構文をもとに派生される受動文は, 動詞の内項である直接目的語(ここでは *it*) を主語とするのが通例であるから, 上記12例のとおり, *it* を主語とする直接受動文が出現すると推定される。

こうした考察を裏付ける証左が見られる。再び次の2つの例を見てみよう。

(4) < give >

King: Where did you buy it? Or who gave it you?

Diana: It was not given me, nor I did not buy it. (AWW. V. iii.271-272)[1602-3]

(5) < lend >

King: Who lent it you?

Diana: It was not lent me neither. (AWW. V. iii.273)[1602-3]

これらの例は, すでに本節 (§ 4) に挙げた例と同じく, 2例とも Shakespeare からの用例だが, (4) の直接受動文 "It was not given me." は, 前行の "who gave it you?" という 'give it me' 型の能動形疑問文に対応している。(5) も同じように, 直接受動文 "It was not lent me neither." は, "Who lent it you?" という 'give it me' 型の能動形疑問文に対応している。これらの事実が強く示唆することは, 上に挙げた (4), (5) 以外の10例の直接受動文も全て Shakespeare に見られることから, 同一作家が用いた直接受動文は12例とも, 'give it me' 型の二重目的語能動文に対応しているということである。

他方, 13例中1例のみ観察される *forbid* の間接受動文 (*I was forbid it.*) は, 'give it me' 型と 'give me it' 型のどちらの能動形式に対応するであろうか。初期近代英語では, 間接受動文は十分確立していることから, *forbid* のような例が観察されることは十分予測され得るが, この例が対応する能動文は, 'give it me' 型 (e.g., "They forbid it me." / "They forbid it to me." (後者は今日では非文法的)) ではなく, 'give me it' 型 (e.g., "They forbid me it.") であると推測される。というのも, Jespersen の示唆するように,

‘ give it me ’ 型の *me* は ‘ give it to me ’ 型の *to me* に対応すると解される統語的付加詞である。付加詞である ‘ give it me ’ 型の *me* が間接受動文の主語に対応するとは考えにくいからである。

本調査で確認できた上記13例をもとにして、‘ give it me ’ 型能動文と ‘ give me it ’ 型能動文、および直接受動文と間接受動文の分布上の対応をまとめると次の表 IV になる。表のうち、‘ OK ’ は用例が十分多く見られることを、‘ ? ’ は稀にしか見られないことを、‘ * ’ は言語事実が観察されないことを表す。

<表IV> ‘ give it me ’ 型能動文・‘ give me it ’ 型能動文と受動文との対応

	直接受動文	間接受動文
‘ give it me ’ 型	OK	*
‘ give me it ’ 型	*	?

つまり、本調査で確認できた例では、2つの人称代名詞を含む二重目的語構文に対応する受動文には必ず *it* が生起し、*it* を主語とする直接受動文は12例全てが ‘ give it me ’ 型能動文に、*it* を保留目的語とする間接受動文は *forbid* の1例のみが ‘ give me it ’ 型能動文に対応している。また、2つの人称代名詞を含む二重目的語構文に対応する受動文は、ほとんど全て *it* を主語とする直接受動文であり、間接受動文の例はほとんど見られない。今日の二重目的語構文に対応する受動文は間接受動文が圧倒的に優勢であることを考えると、初期近代英語には今日と比べて特徴的な統語現象が観察されると言えよう。

5. まとめ

初期近代英語では、二重目的語構文の両目的語が人称代名詞で、かつ、直接目的語が *it* の場合、‘ give me it ’ 型能動文は用法上の制約が強く、極めて稀にしか用いられない。本調査では、222例中3例(1.8%)しか見られず、Shakespeare には全く見られない。他方、‘ give it me ’ 型能動文は、‘ give me it ’ 型に比べると、多くの作品に広く見られ、圧倒的に優勢である。しかし、直接目的語が *it* 以外の人称代名詞 (*me, us, you, thee, him, her, them*) を取るとき、‘ give me it ’ 型が遥かに優勢となる。こうした分布には、統語形式と意味の一対一の対応原理、および位置の圧力の原理が働いていると推察される。

また、2つの人称代名詞を含む二重目的語構文に対応する受動文は、本調査では合計13例が観察され、常に主語または保留目的語のいずれかに *it* を伴う。*it* が主語として生起する直接受動文がほとんど全ての12例、保留目的語として生起する間接受動文が動詞 *forbid* に1例のみである。この調査結果に基づくと、2つの人称代名詞を含む二重目的語構文に対応する受動文は、*it* を主語とする直接受動文は12例全てが ‘ give it me ’ 型能動文に、*it* を保留目的語とする間接受動文は *forbid* の1例のみが ‘ give me it ’ 型能動文に対応していると推定される。その理由は次のとおりである。本調査で確認された受動文は全て Shakespeare のみに観察されるが、(1)その受動文に対応する能動文は、Shakespeare では ‘ give it me ’ 型のみが観察され、‘ give me it ’ 型は全く観察されないこと、(2) Shakespeare には *it* を主語とする直接受動文に対応させて ‘ give it me ’ 型能動文のみが用いられていること、(3) ‘ give it me ’ 型能動文の *me* は ‘ give it to me ’ 型の *to me* に対

応すると解される統語的付加詞であるので、*me* が受動文の主語に対応するとは考えにくいこと、(4) 1例のみ観察される *forbid* の受動文 (*I was forbid it.*) は、(3)により、主語 I は ‘give it me’ 型能動文の *me* (*to me* と解される) に対応するとは考えにくく、‘give me it’ 型能動文の *me* に対応すると考えられること、である。

< 註 >

(1) これら (1a), (1b) の二重目的語構文には、今日と同じように、間接目的語が前置詞 *to* または *for* を伴う形式 (i), (ii) も対応する。すでに、初期近代英語期より、下記の (i), (ii) の前置詞形のほうが、(1a), (1b) の二重目的語構文よりも、用例の出現数、および使用される動詞数の両方において圧倒的である (この点については松元 (2002, pp.37-39) 参照)。

(i) She would not hold out enemy for ever For *giving it to me* .(MV. IV. i.448)[1596-7]

(ii) . I have *made it for you* . (ERR. III. ii.169-70)[1592-3]

上例 (i), (ii) のうち、(i) に見られる *to*-前置詞句は、歴史的に見ると、格屈折が消失したのちに与格名詞に代わって現れるようになった文要素だが、(ii)に見られる *for*-前置詞句は、与格名詞に代わる直接的な文要素ではない (cf. McFadden 2002, p.107)。いずれも二重目的語構文ではないことから、小論では考察の対象から除外する。

(2) 他の特徴については、Visser (1963, § 684), Jespersen (1927, § 14.7.6), Curme (1931, p.97), Quirk et al. (1985, p.1396) も参照。地理的分布の差異については、Orton, Sanderson, and Widdowson (1978), Denison (1993, p.121, n.8) および Upton and Widdowson (1996, pp.52-53) に詳しい。

(3) 今日でも、イングランド北部では ‘give me it’ 型が ‘give it me’ 型や “He gave it to me.” などの前置詞型よりも圧倒的に多く見られる。Gerwin (2013, p.454) によれば、‘give me it’ 型 (54%), ‘give it me’ 型 (17%), ‘give it to me.’ 型 (29%) とのことである。ただ Gerwin は、直接目的語が *it* か否かを区別して調査しているわけではない。

参考文献

一次資料 (引用テキストのみ・出版年順)

Heywood, John, *Johan Johan* (1533) . In *The Plays of John Heywood* (1529-1544) , ed. Richard Axton & Peter Happé. Cambridge: D. S. Brewer , 1991.

Gascoigne, George, *Supposes* (1573) . In *Five Pre-Shakespearean Comedies*, ed. Frederick S. Boas. London: Oxford University Press , 1934 , repr.1958.

Shakespeare, William, *The Riverside Shakespeare Second Edition* (1589-1613) , ed. by G. Blakemore Evans, Boston: Houghton Mifflin , 1997.

Jonson, Ben, *Volpone or the Fox*(1607) . In *Five Plays by Ben Jonson*, ed. Gordon Campbell (The World Classics) . London: Oxford University Press , 1953 , repr.1964.

二次資料（著者名順）

- Biber, Douglas et al . 1999 . *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Longman .
- Bolinger, Dwight . 1977 . *Meaning and Form*. London: Longman .
- Curme, George O . 1931 . *Syntax*. Boston: Heath and Company .
- Denison, David . 1993 . *English Historical Syntax: Verbal Constructions*. New York: Longman .
- Fries, Charles.C . 1940a. *American English Grammar*. Appleton-Century-Crofts .
- _____ . 1940b . “ On the Development of the Structural Use of Word Order in Modern English. ” *Language* 16 , 199-208 .
- Gerwin, Johanna . 2013 . “ Give it me !: Pronominal Ditransitives in English Dialects. ” *English Language and Linguistics* 17-3 , pp.445-463 .
- Jespersen, Otto . 1927 . *A Modern English Grammar on Historical Principles Part III: Syntax Second Volume*. Heidelberg: Carl Winters .
- Kemenade, Ans. van . 1987 . *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*. Dordrecht: Foris Publications .
- Koopman, Willem . 1990a. *Word Order in Old English with Special Reference to the Verb Phrase* . (Ph. D. dissertation)
- _____ . 1990b . “ The Double Object Construction in Old English. ” *Papers from the Fifth International Conference on English Historical Linguistics* (John Benjamins) , pp. 225-243 .
- _____ . 1993 . “ The Order of Dative and Accusative Objects in Old English and Scrambling. ” *Studia Anglica Posnaniensia XXV-XXVII*, pp.109-121 .
- _____ . 1994 . The Order of Dative and Accusative Objects in Old English. MS, University of Amsterdam, HIL .
- McFadden, Thomas . 2002. “ The Rise of the *To*-Dative in Middle English, ” in *Syntactic Effects of Morphological Change* ed. by David Lightfoot (Oxford University Press) pp. 107-123 .
- Orton, Harold, S. Sanderson, and John D.A. Widdowson (eds.) 1978 . *The Linguistic Atlas of England*. London: Croom Helm .
- Polo, Chiara . 2002. “ Double Objects and Morphological Triggers for Syntactic Case, ” in *Syntactic Effects of Morphological Change* ed. by David Lightfoot (Oxford University Press) , pp.124-142 .
- Quirk, Randolph et al . 1985 . *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman .
- Schlüter, Julia . 2005 . *Rhythmic Grammar: The Influence of Rhythm on Grammatical Variation and Change in English*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter .
- Siewierska, Anna and Dik Bakker . 2007 . “ Bound Person Forms in Ditransitive Clauses Revisited. ” *Functions of Language* 14-1 , pp.103-125 .
- Spevack, Marvin . 1973 . *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Hildesheim: Georg

Olms.

Upton, Clive and John D. A. Widdowson . 1996 . *An Atlas of English Dialects*. Oxford: Oxford University Press.

Visser, F. Th . 1963 . *An Historical Syntax of the English Language Part I: Syntactical Units with One Verb*. Leiden: E. J. Brill.

_____. 1973 . *An Historical Syntax of the English Language Part III Second Half: Syntactical Units with Two and with More Verbs*. Leiden: E. J. Brill.

荒木一雄・宇賀治正朋 . 1984 . 『英語史III A』(英語学大系 第10巻) 大修館書店.

宇賀治正朋 . 2000 . 『英語史』 開拓社.

竹林 滋・東 信行・高橋 潔・高橋作太郎 . 1988 . 『アメリカ英語概説』 大修館書店.

松元浩一 . 2002 . 「初期近代英語における ' give it me ' 型二重目的語構文」 *The Kyushu Review* 7 , pp.35-44.

_____. 2004 . 「初期近代英語における二重目的語構文の受動文」 *The Kyushu Review* 9 , pp.25-49.